

新型コロナウイルス感染拡大の状況により、コンサート開催を中止させていただく場合がございます。中止の場合は、ホームページ上にてお知らせします。なお、コンサート実施に際しては以下の点について皆さまのご協力の程お願い申し上げます。

- 風邪などの症状、発熱等がある場合はご来場をお控えください。
- 会場内に設置する手指用の消毒液をご利用ください。
- 会場内ではマスク着用など感染症対策へのご協力をお願いします。

石橋文化センターミュージアムコンサート

石橋文化センターミュージアムコンサートのチケットはコンサートだけでなく
久留米市美術館2階の特別展もご覧いただけるとお得なものとなっております。

この1日、石橋文化センターで音楽や美術に触れてみませんか？

田尻 大喜 〈トランペット〉

Daiki Tajiri



熊本県・天草に生まれ、ケニア共和国にてトランペットを始める。東京音楽大学にて、津堅直弘、栃本浩規、高橋敦、アンドレ・アンリ、井上圭、岡本憲昭の各師に師事。室内楽を林照世、山本孝、水野信行に師事。東京芸術ウインドにて東京佼成ウインドオーケストラのアカデミー生を経てパリ、ベルリンにて研鑽を積む。オーケストラ、吹奏楽の客演を務める他、NHK紅白歌合戦をはじめTV番組、映画、アニメ、CM、舞台などマルチに活躍中。これまでに、矢沢永吉、いきものがかり、miwa、SEKAINOOWARI、RADWIMPS、SHINeeなどのサポートミュージシャンをつとめる。2017.7.7熊本地震をきっかけにソロ活動を始める。日本全国はもとより、アメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ等、年間160本以上開催される公演ではハートフルなプレイと情熱的な旋律で観客を魅了し続けている。

松下 一弘 〈ベース〉

Kazuhiro Matsudhita



福岡県生まれ、福岡市在住。16歳、友人とのロックバンド結成を機にElectricBassを手にする。18歳、福岡コミュニケーションアート専門学校へ入学。卒業後、プロベーシストとして活動を開始。国内外のアーティストとライブ・コンサート・ツアー・イベント・パーティ・レコーディング・制作・スクールレッスンなど。近年では、動画制作編集・音声編集・ミキシングエンジニア・ディレクター・プロデューサーとしても活動している。その音楽性は多ジャンルにおよび、クラシック・ロック・ポップス・J-Pop・ラテン・ジャズ・ゴスペル・R&B・フュージョン・ソウル・ファンク・演歌・民族音楽など、様々なスタイルの音楽を演奏する。それらスタイルや楽曲に合わせて、コントラバスとエレキベースを使い分けている。現在、福岡を中心に音楽活動をつづけるスタジオ・セッションミュージシャンである。

上村 貴子 〈ピアノ〉

Takako Uemura



30歳よりバンド活動を開始。地元福岡のみならず全国各地で数々のアーティストのサポートをこなし続け、絶大な信頼を得ている。故浅野孝巳氏とは2003年に出会い、数年後TAGCのメンバーとなり、RKB主催イベント「風をみる人」など舞台音楽も一緒に参加。2018年よりギター&キーボードの2人編成で「たったかた〜あ」結成。初のCD「Four Seasons」リリース。全国各地でCD発売ライブを行い北九州ではホールコンサートを開催。2015年より元H2Oのなかざわけんじ氏のアルバムでアレンジャー、キーボードとして参加。他にも多数の著名アーティストのサポート歴をもつ。

乙藤 健太 〈ドラム〉

Kenta Otofujii



ドラマー、パーカッショニスト。福岡県立小倉高等学校、洗足学園音楽大学打楽器コース卒業。葉加瀬太郎、ASKA、SEKAI NO OWARI、中西圭三、石川セリ、よしむらさおり、池端克章をはじめ、様々なアーティストのサポートから、メディア出演やレコーディング、イベント企画等、国内外にてジャンルを問わないドラマー、パーカッショニストとして活動中。K-Groove ART office 代表

久留米市美術館 [本館2階]

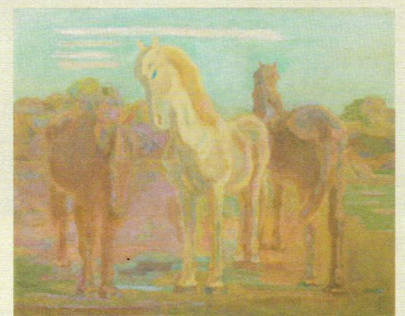
生誕140年 ふたつの旅 青木繁×坂本繁二郎

2022年10月29日(土)～2023年1月22日(日)

開館時間:10:00～17:00(入館は16:30まで)

青木繁(1882-1911)と坂本繁二郎(1882-1969)は、同じ年に久留米に生まれ、同じ高等小学校で学び、同じ洋画塾で画家を志しました。28年の生涯を駆け抜けた青木と、87年の生涯をゆっくりと絵ひとすじに生きた坂本。日本の洋画が成熟へと向かう時代の流れのなかで、それぞれの画風を探求した二人は、ともに画家としての道を歩みながらも、その生き方は対照的でした。

生誕140年という記念の年、66年ぶりの二人展として開催される本展では、めざす方向も性格も、生きた時代の長さも異なる二人の「旅」を、ときに交差させながらひもときます。



坂本繁二郎《放牧三馬》1932年
石橋財団アーティゾン美術館